

## 第3回東邦大学医療センター大橋医学会

平成29年7月27日(木) 16時30分～19時00分

平成29年7月28日(金) 17時30分～19時30分

東邦大学医療センター大橋病院臨床講堂

7月27日(木)

開会の辞 草地信也

### 研修医研究報告 I

座長 福田英嗣

#### 1. 掌蹠膿疱症性関節炎を合併した IgA 血管炎の一例

横田真樹 (研修医)

藤澤有希 (膠原病リウマチ科)

53歳男性。肩甲骨部・前胸部の疼痛、左前腕の紫斑、採血上炎症高値みとめ当院膠原病内科紹介受診となった。紫斑、血管壁への好中球・IgAの沈着、関節炎、腎症状、既往の掌蹠膿疱症の皮疹増悪および関節炎の増悪、以上の所見より掌蹠膿疱症関節炎を合併したIgA血管炎の診断に至った。掌蹠膿疱症とIgA血管炎は、病巣感染、III型アレルギー、好中球遊走因子の産生という点で共通点がある。

#### 2. PFAPA 症候群の一例

和田悠起子 (研修医)

星野廣樹, 林 歩実 (小児科)

【症例】9歳, 男児。【現病歴】20XX年2月20日に38℃の発熱が出現し, 紹介医よりフロモックス処方されるも発熱持続したため2月24日に当院紹介受診した。3歳までこのような発熱を月に一回は繰り返すエピソードがあった。【臨床経過】PFAPA症候群を疑い治療介入せず経過観察したところ数日にて自然軽快した。【結語】PFAPA症候群は診断が困難だが感染症, 自己免疫疾患と鑑別すべき重要な疾患である。

#### 3. 高齢者の子宮体癌の一例

森田浩嗣 (研修医)

小宮山慎一 (婦人科)

子宮体癌は, 40歳代から60歳代の女性に多い。今回, 86歳と高齢の子宮体癌を経験した。近年, 子宮体癌は, 高齢者での頻度が増加しており, 高齢者と子宮体癌について考察を行った。まず, 年齢部位別がん罹患割合及び死亡割合について調べた。次に, 本症例である子宮体癌の年齢別罹患割合及び死亡割合について調べた。子宮体癌の治療法は, 手術療法が一般的であり, 高齢者での治療法の選択にどのような違いがあるか調べた。

#### 4. 肥大型心筋症の失神をきたした一例

荒兼孝行 (研修医)

池田長生 (循環器内科)

60歳男性。2016年に胸部違和感で当院受診、心臓超音波検査で心機能低下認め、冠動脈造影施行も有意な狭窄なし。2017年5月、失神出現し、近医のHolter心電図で洞不全症候群あり当院入院。心房粗動もあり、カルディオバージョン施行し洞調律に回復。その後低心機能で有症状の洞不全症候群として心臓再同期療法でCRT-P挿入した。心エコーでは心筋肥大も指摘され、二次性心筋症精査を施行、心臓MRIで拡張相肥大型心筋症疑われた。

### 特別講演

座長 長谷弘記

#### 5. 今、新病院に必要な患者管理—DPC III 期間短縮へ向けて

草地信也 (副院長・外科教授)

新病院は319床へと大幅にベッド数を削減する中で現在以上の収益を上げることが課せられている。このためには、医療の質と患者サービスを保ちながら入院期間を短縮させることが急務となる。具体的な目標としては、DPCによるIII期間以上の入院患者を減少させることとなる。一方、国は急性期病院と慢性期病院の区別を明確に打ち出し、急性期病院のベッド数削減、重症度、医療・看護必要度の高い患者さんの割合を指定している。事実上、外科系診療科の患者さんの管理が病院経営上重要な意義を持つこととなる。これらの縛りは今後益々高まることが予想される。次のパネルディスカッションでは、外科系診療科の中から脳外科、心血管外科、一般・消化器外科の診療科からDPC III以上の入院期間を要した症例を検討し、入院期間短縮に向けた全病的な取り組みを模索したい。

### パネルディスカッション

座長 岩渕 聡, 草地信也

#### 6. 新病院における入院期間短縮に向けて

中山晴雄 (脳神経外科 講師)

高遠幹夫 (心臓血管外科 助教)

桐林孝治 (外科 助教)

7月28日 (金)

### 一般演題

座長 高橋 啓

#### 7. 超音波検査が有用であった腹腔内出血の一例

藤崎 純 (臨床生理機能検査部)

前谷 容, 渡邊 学 (消化器内科)

腹水穿刺の合併症として、腹水漏出・腸管損傷・ショック・皮下血腫・穿刺部発赤・疼痛などがある。【症例】70歳代男性【主訴】呼吸苦・腹部膨満出現し増悪【現病歴】両心不全、腹水貯留認め加療目的にて入院。腹水コントロールのため利尿剤内服および腹水穿刺が施行されたがその翌日から徐々にHb低下、貧血進行認めた。造影CT施行するも明らかな出血源を特定できず、原因検索目的にてエコーが依頼された。腹水穿刺に伴う合併症として腹腔内出血を経験し、その出血源検索および治療戦略、治療効果判定にエコーが有用であった1例を経験した。

## 8. 婦人科悪性腫瘍術後の乳糜漏に対する脂肪制限食の有用性

武谷千晶, 高橋怜奈, 釘宮剛城, 小宮山慎一, 久布白兼行 (婦人科)  
 城田知己 (栄養部)  
 佐藤 啓 (薬剤部)  
 吉田有輝 (消化器内科)

婦人科悪性腫瘍手術に伴う術後合併症の1つに脂質成分を有するリンパ液が漏出する乳糜漏がある。難治性となった場合、低栄養などの症状を呈し、外科的治療が必要となる場合もあるため、早期治療が必要である。平成24年から28年の過去5年間に乳糜漏に対し脂肪性制限食による加療を行った症例は11例あり、いずれも脂質制限食のみで軽快した。当科における術後乳糜漏の病態および各種臨床検査値に関する検討を報告する。

## 9. 当院における過去9年間の血液培養の動向と主要分離菌の推移

大塚昌信, 伊藤志昂 (臨床検査部, 院内感染対策室)  
 太田雅人, 吉田美江子, 鈴木真事 (臨床検査部)  
 中山晴雄, 松瀬厚人 (院内感染対策室)

血液培養の結果が臨床で有効に利用されるためには、血液培養が適切に行われているかの評価が必要とされている。評価項目は日本臨床微生物学会のガイドライン (ASMのガイドラインに準拠) に示された複数セット採取率、陽性率および汚染率である。今回この評価項目に主要分離菌の推移を加え、2008~2016年度に提出された血液培養 (小児を除く) 検体について調査したので報告する。

## 研修医研究報告 II

座長 松瀬厚人

## 10. ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群と鑑別を要した伝染性膿痂疹の一例

小林奈々 (研修医)  
 長澤知也, 福田英嗣 (皮膚科)

今回、ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群 (以下SSSS) 様の症状を呈する1歳男児の診断、治療を経験した。診断、治療するにあたって伝染性膿痂疹との鑑別に難渋したため、治療や予後も大きく異なる2疾患の比較検討し症例報告することとした。伝染性膿痂疹とSSSSは初期症状では診断に苦慮することが多く、また伝染性膿痂疹からSSSSに移行することもあるため小児の顔面の水疱や痂痂を診た際にはSSSSへの移行に留意する必要がある。

## 11. 診断に苦慮したキャスルマン病の一例

高橋由衣 (研修医)  
 武中さや佳 (膠原病リウマチ科)

81歳女性。発熱、食思不振を主訴に当院紹介受診された。手指に紅斑、大関節に圧痛があり、血液検査では肝機能障害、赤沈亢進、CRP上昇、MPO-ANCA陽性、またフェリチンとIL-2レセプターの異常高値が認められた。抗生剤加療するも改善なく、次にMPAを疑い加療するも症状の改善は認められなかった。リンパ節生検や皮膚生検を行い、生検結果と臨床所見を合わせてキャスルマン病と診断。TCZとPSLで加療を始め、徐々に症状の改善が認められた。

## 12. 失神を繰り返す若年男性の一例

河野優斗 (研修医)  
 橋本 晃 (循環器内科)

ミャンマー出身で来日して10年以上の患者で、繰り返す失神のため前医受診し、精査したが明らかな異常所見認めず、失神の精査・加療目的に当院循環器内科受診し、どういった検査を施行し診断に至ったのか、どういった治療を行ったのか、そしてその疾患について勉強したことについて発表する。

**特別講演**

座長 齊田芳久

**13. 良質で安全な医療を提供するための院内体制の構築**

長谷川友紀（東邦大学医学部医学科社会学講座 教授）

医療の質と安全に社会的な関心が集まったのは1990年代以降である。医療は、本質的に不具合を抱え、病態が不確実に変化する患者に対する侵襲行為であり、①巨大で複雑となった病院組織、②効果的ではあるが高価・安全域の狭い・侵襲的な医療行為の臨床現場への導入、③高齢化にともない複数疾患を有する複雑な患者の増加、が状況を複雑にしている。総じて、要素技術（個々の医療技術）の進歩に、管理技術の進歩が追いついていないことが背景にある。質と安全の考え方の変遷、測定法、主要な課題について整理する。

閉会の辞 草地信也